

例 言

1. 本書は、ナイスホーム株式会社による宅地造成工事に伴う中居町一丁目遺跡4（市遺跡番号684）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 「中居町一丁目遺跡4」は、群馬県高崎市中居町一丁目12-2番地に所在する。
3. 発掘及び整理調査の期間・発掘調査の面積は次のとおりである。
【発掘調査期間】平成28年7月19日～平成28年8月5日
【整理調査期間】平成28年8月6日～平成29年1月31日
【発掘調査面積】135㎡
4. 発掘及び整理調査は、ナイスホーム株式会社・高崎市教育委員会・有限会社毛野考古学研究所による三者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施した。
5. 発掘及び整理調査に関わる経費はナイスホーム株式会社の負担による。
6. 発掘及び整理調査は、常深尚（有限会社毛野考古学研究所）が担当し、遺物実測・観察表作成は有山径世（有限会社毛野考古学研究所）が分担した。
7. 自然科学分析は跡火山灰考古学研究所に依頼し、その報文を第6章に掲載した。
8. 本書の編集・執筆については、矢島浩（高崎市教育委員会文化財保護課）・常深が協議して行い、第1章を矢島、第2～5・7章を常深が執筆した。
9. 遺構及び遺物の写真は常深が撮影し、空中写真は小出拓磨（有限会社毛野考古学研究所）が撮影した。
10. 調査資料は、一括して高崎市教育委員会で保管している。
11. 発掘及び整理調査の参加者は、以下のとおりである。
（発掘調査）新井益子 石原功 稲田康夫 久保さつき 三原昭夫
（整理作業）磯澤洋子 大塚規子 水島美和子 西井照美 半澤利江 山下奈那子 山田美智子 渡辺博子
12. 発掘調査の実施から報告書の刊行に至る過程で下記の諸氏・機関にご協力賜わった。記して感謝申し上げる次第である（敬称略、順不同）。
坂口一 早田勉 深澤敦仁 三浦京子 カネコハウス㈱ 縣北斗工営 佐明鏡

凡 例

1. 挿図中に使用した方位は、国家座標（G系）の北を表す。座標軸は世界測地系である。
2. 本書ではテフラの呼称として次の記号を用いた。
As-A：1783（天明3）年噴出の浅間Aテフラ、As-B：1108（天仁元）年噴出の浅間Bテフラ
As-C：3世紀終末から4世紀初頭噴出の浅間Cテフラ、Hr-FA：6世紀初頭噴出の榛名ニッ岳浅川テフラ
3. 遺構の表記は以下の記号を用いた。
SK：土坑 SP：ピット SZ：周溝墓
4. 遺構及び遺物実測図の縮尺は次のとおりである。
【遺構】全体図…1/200 墓…1/100、1/50 土坑…1/60
【遺物】土器…1/3 石製模造品…1/2
5. 遺物番号は、実測図・観察表・写真図版とも共通である。
6. 本文・土層断面図・土層注記中のローマ数字は基本土層、算用数字は遺構内堆積土の層番号を表す。
7. 土層及び遺物の色調は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄著 ㈱日本色彩研究所）を使用した。
8. 遺物図中の塗り表現は以下の通りである。 ■ ●

目次

巻頭図版・例言・凡例・目次

第1章 調査に至る経緯	1	第5章 遺構と遺物	6
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	2	第1節 調査の概要	6
第1節 地理的環境	2	第2節 周溝墓	7
第2節 歴史的環境	2	第3節 土坑・ピット	13
第3章 調査の方法と経過	5	第6章 自然科学分析	15
第1節 調査の方法	5	第7章 調査成果	19
第2節 調査の経過	5	抄録・写真図版・奥付	
第4章 基本層序	5		

挿図目次

第1図 調査区域図	1	第9図 1号周溝墓出土遺物②	11
第2図 中居町一丁目遺跡位置図	2	第10図 土坑平面図・断面図及び出土遺物	14
第3図 中居町一丁目遺跡周辺の遺跡分布	3	第11図 土層柱状図	17
第4図 基本層序	5	第12図 中居町一丁目遺跡テフラ分析写真	18
第5図 中居町一丁目遺跡4全体図	6	第13図 井野川低地帯周辺の前方後方形周溝墓と前期古墳	19
第6図 1号周溝墓平面図・断面図	8	第14図 1号周溝墓と関連遺構	20
第7図 1号周溝墓遺物出土状況図	9	第15図 剣形石製模造品	21
第8図 1号周溝墓出土遺物①	10		

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧表	4	第4表 土坑出土遺物観察表	14
第2表 1号周溝墓出土遺物観察表	12	第5表 中居町一丁目遺跡におけるテフラ検出分析結果	16
第3表 ピット一覧表	14		

写真図版目次

巻頭図版1

調査区遠景(北東から)

調査区全景(南西から)

巻頭図版2

SZ01南西部全景(南から)

SZ01北東部遺物出土状況(北東から)

SZ01出土石製模造品及び未成品

P L. 1

調査区全景(空撮、南から)

SZ01北東部全景(空撮、西から)

P L. 2

SZ01南西部全景(空撮、北から)

SZ01南西部南壁断面(北から)

SZ01南西部西側(南から)

SZ01南西部東側(南から)

SZ01南西部南壁As-B(北から)

P L. 3

SZ01北東部全景(北東から)

SZ01北東部西壁断面(東から)

SZ01北東部南側(東から)

SZ01北東部北側(東から)

SZ01北東部石製模造品出土状況(東から)

P L. 4

SZ01北東部遺物出土状況(北から)

SZ01北東部土師器高坏(12)出土状況(北東から)

SZ01北東部土師器壺(17)出土状況(北東から)

SK01全景(東から)

SK03全景(東から)

P L. 5

SZ01出土遺物①

P L. 6

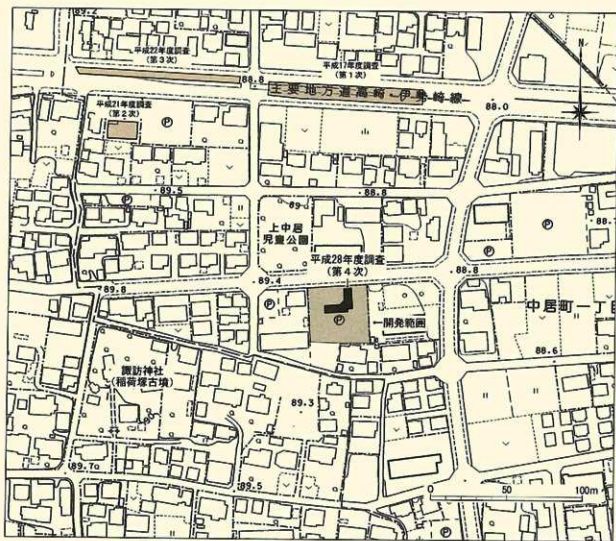
SZ01出土遺物②

SK01-03出土遺物

第1章 調査に至る経緯

平成28年5月、土地所有者のナイスホーム株式会社から、高崎市中居町一丁目において計画している宅地造成工事に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である中居遺跡群内に所在するため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。同年5月9日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書が提出され、同年5月26日に試掘（確認）調査を実施した。その結果、古墳時代の遺構を確認した。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「中居町一丁目遺跡4」とした。同年6月10日に文化財保護法に基づく届出が提出された。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、平成28年7月8日にナイスホーム株式会社と民間調査機関有限会社毛野考古学研究所との間で契約を締結、また同日にナイスホーム株式会社・有限会社毛野考古学研究所・市教委での三者協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督をすることとなった。



第1図 調査区域図（高崎市発行「高崎市都市計画基本図」1/2,500）

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 地理的環境

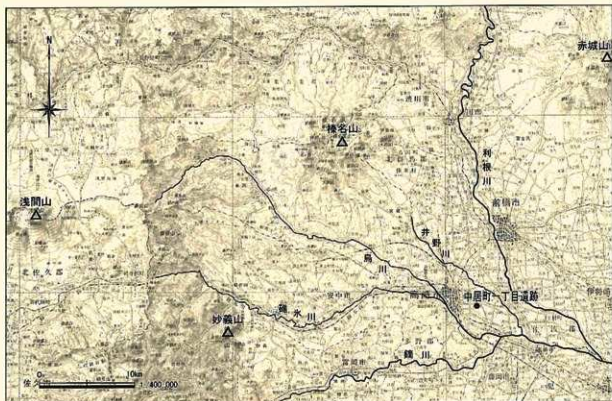
中居町一丁目遺跡は関東平野北西端部の高崎台地上に立地し、標高は90.0mである。高崎台地は、約2.2万年前の浅間山噴火に伴う前橋泥流堆積物を基盤とする前橋台地の西方、井野川と烏川に挟まれた地域を指し、前橋泥流堆積物の上位には約1万年前に堆積した高崎泥流が堆積している。台地上は小河川が網目状に流れ、低湿地が入り組んだ地形となる。井野川は榛名山中腹に源を発し、幅約10kmの低地帯を伴いながら、烏川に合流する。本遺跡は高崎台地の東端部にあり、東側に井野川低地帯を臨む位置にある。

第2節 歴史的環境

本遺跡(1)周辺の高崎台地では、約1万年前の高崎泥流の堆積により旧石器時代の発見例はなく、縄文時代の資料も断片的である。上中居遺跡群(5)で縄文時代中期後半の集石や前期～後期の土器、土偶・石棒が出土している。倉賀野万福寺遺跡(94・95)や中居町一丁目遺跡3(4)で竈穴住居跡が検出されている。

弥生時代は中期後半になって竜見町遺跡・城南小学校校庭遺跡・高崎競馬場遺跡(35)で土器が出土し、高岡村前Ⅱ遺跡(42)で住居、高岡堰村遺跡(46)で環濠の溝が確認された。

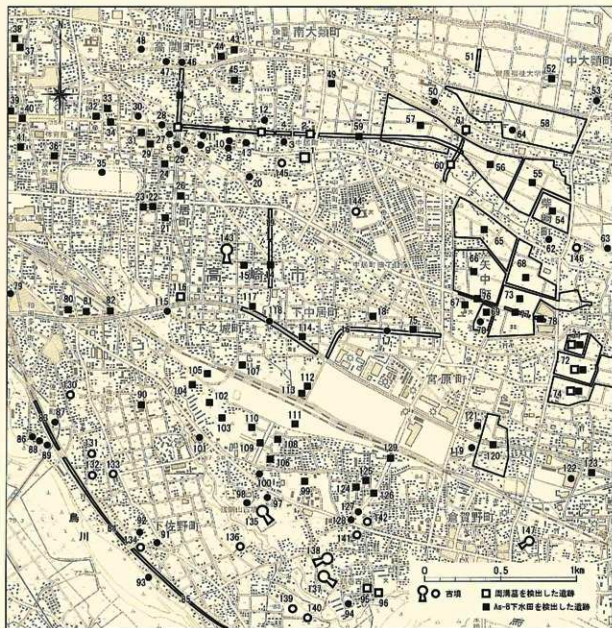
古墳時代には、4世紀末頃から烏川左岸に倉賀野古墳群と佐野古墳群が形成される。倉賀野古墳群では、浅間山古墳(135)・大鶴巻古墳(137)に続き、5世紀後半の小鶴巻古墳(138)が築造される。佐野古墳群では長者屋敷数天



第2図 中居町一丁目遺跡位置図(国土地理院発行『宇都宮』・『長野』1/200,000を50%縮小)

王山古墳(134)に始まり、6世紀後半～7世紀初頭の蔵王塚古墳(133)・漆山古墳(132)まで継続する。7世紀中葉～末には、倉賀野古墳群東方に一本杉古墳(141)・安楽寺古墳(142)が築造される。烏川左岸の集落は、舟橋遺跡(83)・下佐野遺跡(84・85)・上佐野舟橋遺跡(86～89)・倉賀野万福寺遺跡(94・95)があり、本遺跡周辺でも中居町一丁目遺跡(2)・上中居遺跡群(5)において前期の集落と周溝墓が確認された。7世紀の上中居町西2遺跡(13)や上中居字名室遺跡(20)では、前代と異なって東西南北を指向した大溝が掘削され、土地利用の変化が指摘されている。

平安時代にはAs-B下の水田が多く遺跡で確認されている。下之城条里遺跡(118)では、1町間隔の水路を伴う大畦畔を構築し、条里制地割に基づいた水田経営を行っていたことが明らかにされた。条里制地割は下之城村前遺跡(106～111)・下之城仲沖遺跡(102～105)でも確認され、さらに下層の水田からも同一の溝が検出され、B水田以前からの条里制地割の存在が示された。奈良平安時代の集落は中居町一丁目遺跡(2)・上中居字薬師遺跡(8)などがある。



第3図 中居町一丁目遺跡周辺の遺跡分布 (国土地理院発行「下室田」・「前橋」・「高崎」・「富岡」1/25,000)

第3章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

表土掘削は重機を使用し、ローム漸移層 (XI層) 上面まで掘削した。遺構検出はXI層上面で行い、周溝溝・土坑・ピットを確認した。遺構の測量は、断面図を手実測 (縮尺1/20)、平面図を電子平板で行った。平面図中の等高線は10cm間隔とした。遺構の写真撮影は、35mmモノクロ・カラーリバーサルのフィルムカメラとデジタルカメラを併用した。遺跡全景の空中写真はドローン (DJI社 Phantom 2 Vision+) を使用して撮影した。

遺物注記は手書きにて行い、「684 SZ01 No 1」のように注記した。遺物の写真撮影はデジタルカメラ (Nikon Df) を使用した (JPEG、RAW)。遺構図・遺物実測図・報告書作成ともに Adobe® Creative Suite® でデジタルトレース・編集等を実施し、印刷所にはPDF型式 (X-1a; 2001) で入稿した。

第2節 調査の経過

- 【7月】 19日:表土の重機掘削を開始する。仮設トイレ・器材等を搬入。20日:重機掘削を終え、壁面の精査を行う。
21日:遺構の検出作業を行い、溝・土坑・ピットを検出する。22日:S Z 01 南西部の掘削を開始する。
27日:S Z 01 南西部の完掘写真を撮影し、S Z 01 北東部の掘削を開始する。28日:S Z 01 北東部から石製模造品が出土する。29日:S Z 01 北東部の遺物取上げ。
- 【8月】 3日:S Z 01 北東部の完掘写真を撮影する。東側隣接地の工事立会。4日:土坑・ピットの遺構掘削を行う。市教委による現地調査終了確認を受ける。5日:調査地全体の空撮と遺構平面測量を行う。器材等の片付け。8日:調査概報の作成。下旬:出土遺物の洗浄・注記・接合、遺構図・写真の整理を行う。
- 【9月】 報告書掲載遺物の写真撮影・実測、遺構全体図の編纂、遺構写真図版作成を行う。
- 【10月】 報告書掲載遺物の実測・トレース、遺構図版作成、報告書原稿執筆を行う。
- 【11・12月】 遺物図版作成、報告書編集を行う。報告書データを入稿し、校正を行う。
- 【1月】 報告書の印刷製本を行う。成果品の準備を行い、報告書とともに納品する。

第4章 基本層序

I層: 駐車場砕石。

II層: 現代の住宅造成土。部分的に深い擾乱を伴う。

III層: 褐灰色土(10YR6/1)。As-A多量、ローム粒少量含む。

IV層: 褐灰色土(10YR6/1)。As-A・ローム粒・炭化物少量含む。

V層: 褐灰色土(10YR4/1)。As-B多量、ローム粒・埋層ブロック少量含む。

VI層: 褐灰色土(10YR4/1)。As-Bを塊状に含む。

VII層: As-Bの一次堆積層。

VIII層: 黒色粘質土(10YR2/1)。炭分沈着。

IX層: 黒色土(10YR2/1)。As-C含む。

X層: 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒多量に含む。

XI層: ローム漸移層。

XII層: ローム層。



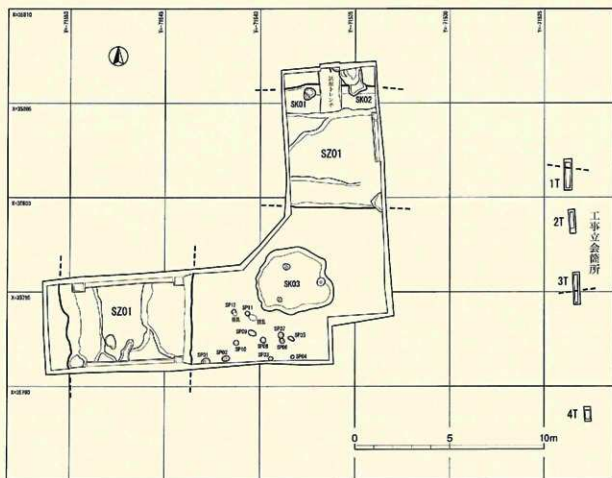
第4図 基本層序 (1/40)

第5章 遺構と遺物

第1節 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は周溝墓1基 (SZ01)、土坑3基 (SK01~03)、ピット12基 (SP01~12) である。出土遺物は縄文土器、古墳時代前期から中期の土師器、古墳時代中期の石製模造品、平安時代の須恵器があり、大部分は周溝墓からの出土である。

1号周溝墓 (SZ01) の周溝は、調査当初は竪穴住居跡や用水路、居館の濠などの可能性も考えられ、時代も古墳時代から平安時代の幅で捉えられていた。その後、溝の両側の立ち上りの類似、直角に交差する方向性、覆土の共通性などから2本の溝が同一の溝である可能性が高まった。さらに溝がAs-C混黒色土を切ることで、出土遺物が4世紀後半から5世紀前半にはほぼ限定され、テフラ分析によるHr-FAの検出もあったことから、時期は古墳時代前期から中期に絞られた。墳丘と解釈される確定的な土層がないことから古墳の可能性は低く、最終的には、隣接地における工事立会で溝の延長が確認されたことから、前方後方形の周溝墓であるとの想定が可能となった。このほか、1・3号土坑は中期の縄文土器を出土した土坑であり、1号周溝墓にも縄文土器の混入があることから、縄文時代中期の遺構もある程度の広がりか想定される。



第5図 中居町一丁目遺跡4全体図 (1/200)

第2節 周溝墓

1号周溝墓（第6～9図、P.L. 1～6）

位置 L字になる調査区域の北東部と南西部で周溝を検出。

重複 北東部の周溝が倒木痕SK02に切れ、縄文時代中期の土坑SK01を切る。

形状 北東部・南西部ともに周溝内側は整った直線を示し、調査区外で直交するのに対し、周溝外側は多少の凹凸がありながら総体的には外側へ膨らみをみせる。方形周溝墓としては周溝幅がかなり大規模になるため判断に躊躇したが、東側の工事立会によって、北側周溝が東へ直進しないこと、また南へ直角に折れ曲がることもないことが判明し、南東へ斜行する様子から、同所を前方部とする前方後方形の周溝墓であると判断した。

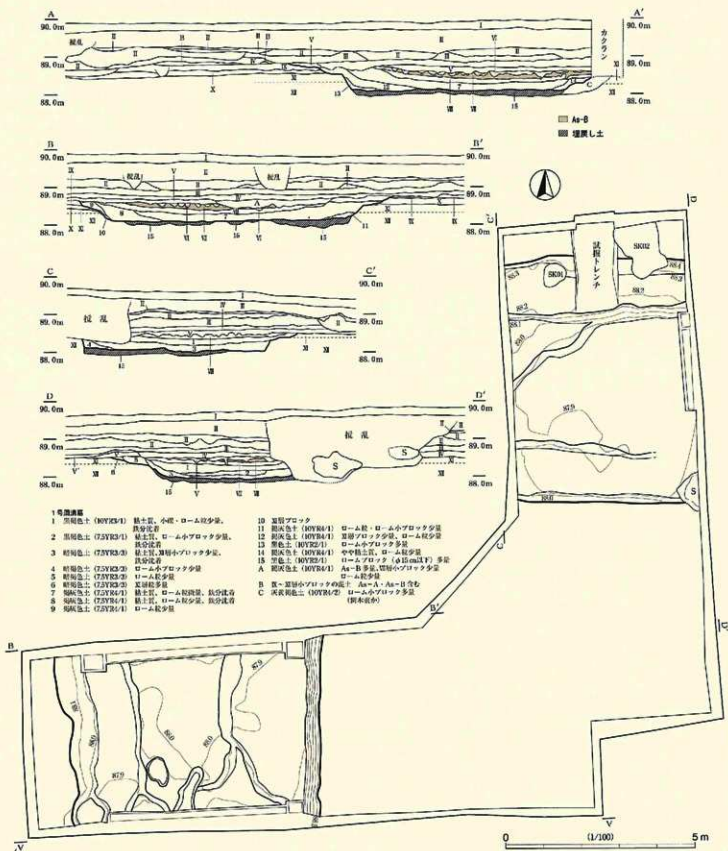
主軸方位 南西部周溝（後方部西辺）内側でN-1°-E、北東部周溝（後方部北辺）の内側でN-89°-Wを示す。

規模 調査区域内の後方部は、南北8.2m、東西10.4mを検出したが、周溝の幅を考えれば、相当の規模が想定される。高崎市矢中村東B遺跡SZ03などの形状に基づいた想定図（第13図9）では、墳長28.5m（後方部長16.0m、前方部長12.5m）程度の規模になる。調査区域内では埋葬施設は検出されていない。

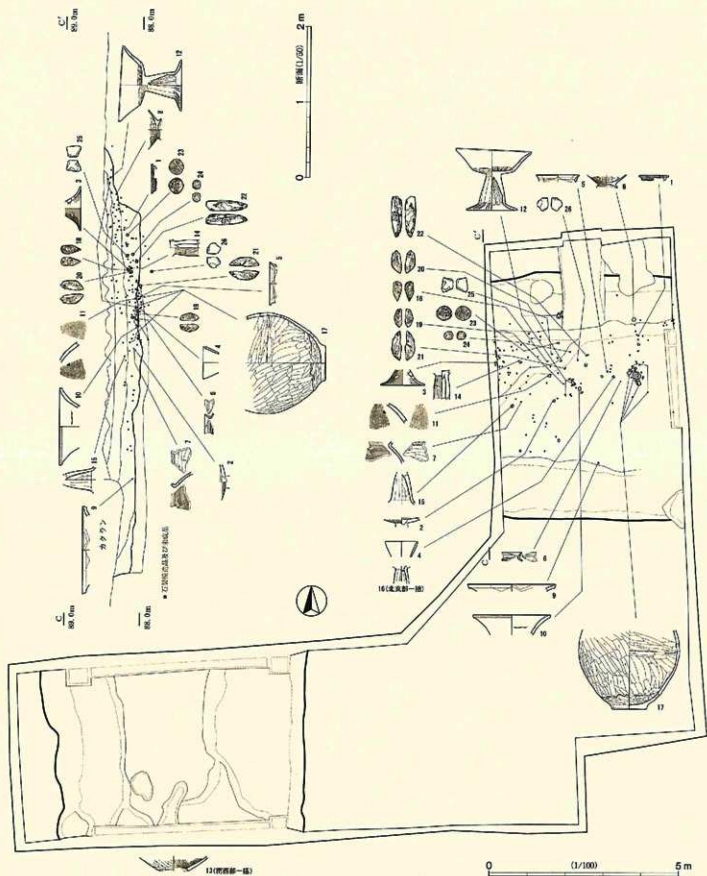
周溝 検出面での上幅は北東部が6.2～6.5m、南西部が6.3～7.0mで南西部がやや幅広である。下幅についても北東部が4.6～4.8mであるのに対し、南西部は5.5～5.8mと広い。周溝の断面形は概ね逆台形であるが、周溝内側では特に下部の立ち上がりは急角度となり、後方部の整った規格への意識が窺われる。これに対し周溝外側は比較的緩やかな立ち上がりとなる。ところで南西部の調査区壁面で見ると、周溝の本来の掘り込み面はAs-C混黒色土（IX層）の上面である。IX・X層の掘り込みは緩やかな傾斜をつけ、XI・XII層に達すると急角度の掘り込みとなる。緩傾斜となるIX・X層の掘り込みは、おそらく墳丘の裾を造り出すための掘り込みで、低墳丘が存在した可能性が考えられる。周溝の深さを調査区壁の断面で計測すると、北東部東壁で70cm、同西壁で60cm、南西部北壁で84cm、同南壁で88cmとなり、深さでも南西部が大きく上回っている。ただし周溝底面の標高値は、南西部87.9～88.0m、北東部が87.9mとほぼ揃っていることから、現地地形と同様に北東方向へ緩やかに下がる旧地形の影響と思われる。ちなみに工事立会箇所における周溝底面の標高も87.9mを示している。底面を微細にみると、周溝と同方向の浅い溝状ないし土坑状になる部分が認められる。南西部では中央部がやや高く、周溝内側と外側の壁沿いでは深さ5～15cmの浅い溝状になる。幅は内側で2.3m、外側で1.0mほどである。中央部南寄りには、水流によって抉られたような70×50cmの不整形な土坑があり、中には粗砂が堆積していた。深さ15cmである。北東部では周溝内側の壁沿いが深さ5cm前後の浅い溝状になる。また北西側では5～10cmほどの高まりがみられる。このような底面の様子から、周溝の掘削作業は、溝中央と立ち上がりの両側壁のおよそ3ブロックに分けて行われたことが窺われる。なお底面の凹凸は、後述するように埋め戻されて平坦に整形される。

覆土 ロームブロックを主体とするような、墳丘を思わせる堆積土は確認されていない。また断面AでIX層の上に直接堆積するB層について、現地では周溝掘削土による盛土の可能性を考えたが、テフラ分析によりAs-BとAs-Aの含有が確認されたため、その可能性は否定された。しかし、前述のように後方部裾の緩傾斜面が墳丘を意識した可能性があること、覆土下層の7層などが後方部側から流入する傾向が強いことから、ロームブロックをそれほど含まない土による低墳丘が存在した可能性がある。次に調査区壁の断面をみると、4カ所（断面A～D）ともに覆土の最下層に15層が確認できる。15層はIX・X起源と思しき黒色土とロームブロックの混土であり、10～15cmほどの厚さではほぼ水平に堆積している。15層上面の標高はDで88.0m、A～Cで88.1mとほぼ揃っている。これは周溝の内側（後方部）ないし外側から流れ込んだ状態ではなく、周溝掘削後に一定の深さまでの埋戻しが行われた可能性を示している。ただし15層上面が硬化するような状況は確認されていない。北東部周溝の北

第5章 遺情と遺物

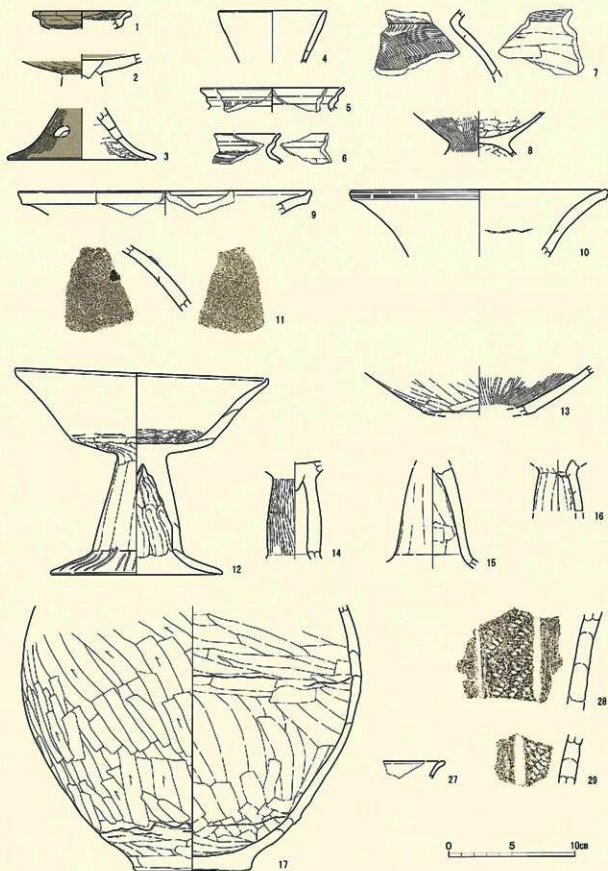


第6図 1号周溝墓平面図・断面図



第7图 1号周溝墓遺物出土狀況图

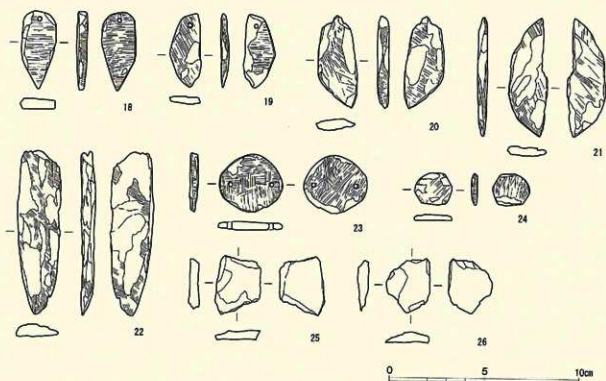
第5章 道橋と遺物



第8図 1号周溝墓出土遺物①

西部底面にみられる高まりは、理由は定かでないが、想定される埋戻しレベルで周溝掘削をあらかじめ止めたことによる高まりと考えられる。15層より上位は自然堆積とみられ、粘土質の褐色土ないし暗褐色土(1・3・7層など)が堆積し、南西部の7層上部からはテフラ分析によりHr-FAが確認された。その後には黒色粘質土(Ⅷ層)の堆積があり、As-B(Ⅷ層)の降下がみられる。Ⅷ層はAs-B下水田に通有の黒色土によく似ているが、上層(Ⅷ層)からの働き込みがあって畦畔などは確認できなかった。As-Bは相対的に南西部で残存状況が良いが、これは南西部の周溝が北東部に比べ規模が大きいことで埋没速度が速く、上層からの働き込みを免れた結果と考えられる。As-B下面の標高は北東部、南西部ともに88.4mである。ちなみに工事立会箇所においても同様のAs-B及び下位の土層を確認しており、As-B下面の標高はほぼ同じ88.3mであった。As-B上面には小規模な溝状の掘り込み(Ⅷ層)が連続してみられる。これは同じAs-B混土のⅧ層中で行われた何らかの掘削のうち、深いものあるいは古いものが残存した痕跡と考えられる。周溝はⅧ層によってほぼ完全に埋没し、旧地表(Ⅷ層上面)レベルまで復帰していることから、この段階で周溝跡地の利用が始まったと考えられる。小規模な溝状の掘り込みは、周溝と同一方向に掘削された畝の畝溝が断面に現れたものと解釈しておきたい。As-B混土より上位はAs-A混土(Ⅲ・Ⅳ層)が堆積するが、これは調査区域全体に堆積するものである。

遺物 出土遺物は周溝北東部(後方部北辺)に大きく偏っている。南西部では覆土中に小片が散在する程度で、破片数は合計13点である。内訳は土師器壺10点、高坏3点である。高坏は古墳時代中期前半のものである。北東部出土品と接合あるいは同一個体と推測されるものはみられなかった。一方、北東部では覆土中の一括で取り上げた小片が29点、出土位置を記録したものが152点(土器143点、石製模造品及び未成品9点)である。土器の内訳は土師器S字壺16点、「く」の変53点、壺73点、埴3点、器台1点、高坏26点で、古墳時代前期後半から中期前半のものである。以下、北東部の状況を記す。平面的な遺物の分布は周溝中央から外側に偏っており、後



第9図 1号周溝墓出土遺物②

第5章 遺構と遺物

番号	品名	法量 (cm)	①組成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・形状・技法の特徴	出土位置等
1	土師器 高杯	口径 底径 器高 [7.0] [4.1]	①良好 ②赤褐色/明赤褐色 ③白化粧(局部) ④厚化粧片	外面:口縁部コナテ、変形ミガキ、赤彩。 内面:口縁部一変部積位ミガキ、赤彩。	北東部
2	土師器 高杯	口径 底径 器高 [9]	①良好 ②赤褐色/赤褐色 ③石英、黒色炭物、白色化粧 ④厚化粧片	外面:杯部ヘラナテ、赤彩。 内面:杯底部ヘラナテ、赤彩。	北東部
3	土師器 高杯	口径 底径 器高 [11.7] [4.1]	①良好 ②赤褐色/明赤褐色 ③石英、黒色炭物(局部) ④胎土1/8	外面:器部積位ミガキ、赤彩。 内面:器部積位ハケメ一変部ヘラナテ。 透孔3孔。孔径(1.05)cm。	北東部
4	土師器 埴	口径 底径 器高 [8.4] [4.1]	①良好 ②赤褐色/赤褐色 ③石英、黒色炭物、白色化粧、褐色胎土 ④口縁部片	外面:口縁部コナテ。 内面:口縁部コナテ。	北東部
5	土師器 5字壺	口径 底径 器高 [11.4] [1.9]	①良好 ②赤褐色/赤褐色 ③石英、黒色炭物、白色化粧 ④口縁部片	外面:口縁部コナテ、器部に条溝の無いハケメ。 内面:口縁部コナテ。	北東部
6	土師器 5字壺	口径 底径 器高 [2.4]	①良好 ②赤褐色/赤褐色 ③石英、黒色炭物、白色化粧 ④口縁部片	外面:口縁部コナテ、器部一変部積位ハケメ一変部積位ナテ。 内面:口縁部コナテ、器部積位ヘラナテ。	北東部
7	土師器 壺	口径 底径 器高 [5.2]	①良好 ②赤褐色/赤褐色 ③石英、黒色炭物、白色化粧 ④胎土一変部積位	外面:器部および器部に条溝の無い付位ハケメ一変部積位ハケメ。 内面:器部に条溝の無い積位ハケメ。器部積位ヘラナテ。	北東部
8	土師器 5字壺	口径 底径 器高 [3.6]	①良好 ②赤褐色/赤褐色 ③石英、黒色炭物、白色化粧、種 ④胎土下位一変部積位	外面:器部下位に積位ハケメ。台部積位ハケメ。 内面:器部下位に積位ヘラナテ。台部積位ナテ。	北東部
9	土師器 壺	口径 底径 器高 [23.0] [1.9]	①良好 ②赤褐色/赤褐色 ③石英、黒色炭物、白色化粧 ④口縁部片	外面:口縁部コナテ。 内面:口縁部コナテ。	北東部
10	土師器 壺	口径 底径 器高 [20.1] [5.3]	①良好 ②赤褐色/赤褐色 ③石英、黒色炭物、白色化粧、褐色胎土 ④口縁部片	外面:口縁部コナテ。 内面:口縁部コナテ。	北東部
11	土師器 壺	口径 底径 器高 [19.0] [1.5]	①良好 ②赤褐色/赤褐色 ③石英、黒色炭物、白色化粧 ④胎土	外面:断面L形残文を模倣した、S字状の筋文。ボタン状胎土。 内面:積位ヘラナテ。	北東部
12	土師器 高杯	口径 底径 器高 [16.4]	①良好 ②赤褐色/明赤褐色 ③石英、黒色炭物、白色化粧、種 ④3/4	外面:口縁部コナテ、杯部ヘラナテ。器部積位ヘラナテ。器部コナテ一変部積位ミガキ。 内面:口縁部コナテ。杯部積位は木口状工具による積位ナテが認められ、杯底部ヘラナテ。胎土積位より下で半成位の指ナテ。器部コナテ。	北東部
13	土師器 高杯	口径 底径 器高 [3.8]	①良好 ②赤褐色/赤褐色 ③石英、黒色炭物、白色化粧、褐色胎土 ④杯部片	外面:杯部ヘラナテ。 内面:杯部積位ミガキ。	南西部
14	土師器 高杯	口径 底径 器高 [7.6]	①良好 ②赤褐色/赤褐色 ③石英、黒色炭物、白色化粧 ④胎土	外面:器部積位ミガキ。 内面:器部積位ミガキ。	北東部
15	土師器 高杯	口径 底径 器高 [6.0]	①良好 ②赤褐色/赤褐色 ③石英、黒色炭物、白色化粧、褐色胎土 ④胎土1/3	外面:器部積位ヘラナテ。器部コナテ。 内面:積位ヘラナテ下位に積位ヘラナテ。器部コナテ。	北東部
16	土師器 高杯	口径 底径 器高 [4.0]	①良好 ②赤褐色/赤褐色 ③石英、褐色胎土 ④胎土上半1/4	外面:器部積位ヘラナテ。 内面:器部積位ヘラナテ。	北東部
17	土師器 壺	口径 底径 器高 [8.9] [21.0]	①良好 ②赤褐色/赤褐色 ③石英、黒色炭物、白色化粧、種 ④胎土下位一変部積位	外面:器部下位に積位ヘラナテ一変部積位ヘラナテ。底部ナテ。 内面:器部積位ヘラナテ一中位に積位ヘラナテ。底部ヘラナテ。	北東部
18	石製埴 埴形	長さ41.5cm、幅1.8cm、厚さ5.5cm、重さ6.25g。 鏡状磨製。表裏面・側面研削。内孔を1孔穿つ。			北東部
19	石製埴 埴形	長さ3.9cm、幅1.6cm、厚さ0.45cm、重さ3.35g。 鏡状磨製。表裏面・側面研削。内孔を1孔穿つ。			北東部
20	石製埴 埴形	長さ4.9cm、幅2.1cm、厚さ0.65cm、重さ8.30g。 鏡状磨製。表裏面・側面研削。上面に突出部分あり。			北東部
21	石製埴 埴形	長さ6.3cm、幅2.05cm、厚さ0.55cm、重さ8.30g。 鏡状磨製。表裏面・側面研削。			北東部
22	石製埴 埴形	長さ8.65cm、幅2.3cm、厚さ0.8cm、重さ20.03g。 鏡状磨製。表裏面研削。側面は下部のみ研削あり。			北東部
23	石製埴 埴形	長さ3.1cm、幅3.3cm、厚さ0.45cm、重さ0.57g。 鏡状磨製。内孔を2孔穿つ。表裏面・側面研削。			北東部
24	石製埴 埴形	長さ1.7cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重さ1.74g。 鏡状磨製。表裏面・側面研削。			北東部
25	石製埴 埴形	長さ3.15cm、幅2.4cm、厚さ0.55cm、重さ5.84g。 鏡状磨製。側面研削。			北東部
26	石製埴 埴形	長さ2.9cm、幅2.3cm、厚さ0.55cm、重さ3.80g。 鏡状磨製。側面研削。			北東部
27	埴器 埴	口径 底径 器高 [1.4]	①深灰色 ②灰黄/灰黄 ③白色胎土 ④口縁部片	外面:口縁部ナテ。 内面:口縁部ナテ。	北東部
28	埴土器 深鉢	口径 底径 器高	①良好 ②灰黄/灰黄 ③石英、長石、褐色胎土 ④胎土	外面:断面L形残文を模倣した丸棒状工具による器底文一変部積位の遺文を 磨り消し。 内面:底位ナテ。	北東部 加付神社式
29	埴土器 深鉢	口径 底径 器高	①良好 ②灰黄/灰黄 ③石英、長石、褐色炭物、褐色胎土 ④胎土	外面:断面L形残文を模倣した丸棒状工具による器底文一変部積位の遺文を 磨り消し。 内面:積位ナテ。	北東部 加付神社式

第2表 1号周溝墓出土遺物観察表

方部からの流入ではないことを示している。また垂直分布も明らかに周溝外側からの流入を示しており、周溝底面立ち上がり部分の三角堆積土に内側外側ともに遺物が全く含まれないことから、周溝墓構築から一定期間をおいた遺物であることが分かる。周溝埋戻し土(15層)にも遺物は含まれない。基本的には覆土上層(1層)は古墳時代中期、下層(3層)が古墳時代前期から中期の遺物を含む。これは南西部の覆土上層(7層)の上部にHr-FAを検出したことと整合性がある。遺物は二つのまとまりがあり、一つは周溝の東寄りにおいて土師器甕(17)の底部が正位で出土し、接合する胴部片が周辺に水平的に散在するものである。他の遺物と異なり、この甕だけは流れ込みではなく、同所に置かれた後に割れたと考えられ、破片の全くない口頸部は周溝の他所に遺棄された可能性がある。もう一つのまとまりは、中央部と北部で土師器高坏(12)の坏部と脚部がやや距離をおいて出土し、その間の空間から石製模造品及び未成品(18~26)が出土したものである。高坏(12)の坏部と脚部の出土レベルには55cmの高差があり、脚部の出土した周溝中央部は埋没が最も遅く始まる場所で、窪地のような状態であったことが分かる。前述の甕(17)も同様の位置にある。この窪地が周溝外側から埋没していく過程で流入したのが、破片で出土したその他の遺物ということになり、したがって造墓時の葬送祭祀に使われた遺物は調査範囲内では出土していないと判断される。

(1)~(11)は4世紀後半の土師器である。(1)~(3)は赤彩品で、前期の器台と高坏はこれ以外に出土していない。埴は3点のうち口縁部は(4)だけである。S字壺は(5)・(6)が唯一の口縁部である。他に胴部片13点、脚部片1点(8)がある。「く」の字壺のうち、厚手で外面ハケメ調整のものは(7)の1点だけである。壺で口縁部が残るのは(9)・(10)がある。(9)は口縁が大きく外反し、口唇部を面取りする。(10)は口縁上位で弱く外反する。他に外面ミガキ・内面ハケメ調整の空胴部片が一定量あるが、接合率が悪く固化できなかった。(11)は搬入品とみられる特徴的な胎土の壺で、平成17年度調査の1号周溝墓にも類例がある。(7)とともに南関東との交流を示すものといえる。(12)~(17)は5世紀前半の土師器である。高坏(12)~(16)は坏部が屈折し柱状脚となるもので、破片数は20点である。(17)は外面ケズリ整形の甕である。煤の付着や被熱はなく、煮沸具としての使用痕がみられない点に注意される。

石製模造品は蛇紋岩製で、剣形(18・19)と有孔円板(23)がある。同じく蛇紋岩で穿孔がなく研磨途中の未成品(20~22・24)や剥片(25・26)もあわせて出土していることから、この場での祭祀行為を示すものではなく、製作段階の廃棄と祭祀での使用後の廃棄が累積した結果と解釈される。未成品に対して3点の製品が土層的により上位で出土していることが、その前後関係を示しているものの、大きな時間差はないと考えられる。

このほかに平安時代の須恵器碗(27)、縄文時代中期の深鉢(28・29)が破片で混入していた。

時期 古墳時代前期に築造され、中期には周溝の半分程度が埋没し、その後Hr-FA・As-Bの降下を経て、完全に埋没する。断面A・Bで観察されたように、周溝がAs-C混黒色土(Ⅷ層)を切っていることから、As-C降下以降である。出土遺物に4世紀前半のものがないことから、現時点では4世紀後半と考えられる。

第3節 土坑・ピット

土坑は3基検出した(第9・10図、P.L.4・6)。1号土坑は1号周溝墓に南側の上部を削られているが概ね長軸68cm、短軸58cmの楕円形を呈する。北東側で深さ28cm、一段高い南西側で深さ13cmである。覆土はロームブロックを含む褐灰色砂質土が主体である。覆土上層(1層)から縄文土器片が3点まとまって出土した。2号土坑は長軸1.7m以上、短軸1.15mの不整形長方形を呈する。深さは80cmである。地山が落ち込むような埋没状況から、倒木痕と判断される。As-B降下以前のものである。出土遺物は土師器片1点である。3号土坑は東西3.96m、南北

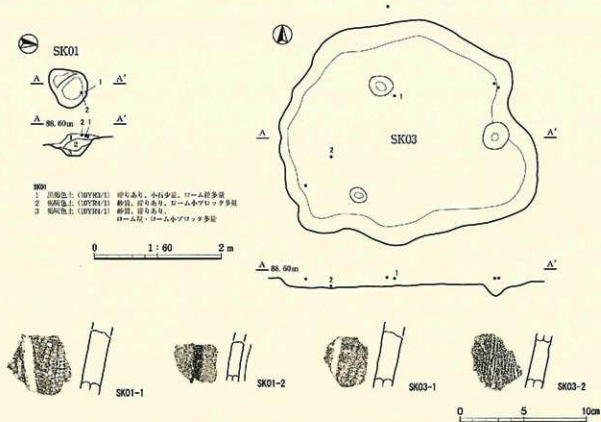
第5章 遺構と遺物

3.50mの不整形円形を呈する。深さは10cm前後で、底面は凹凸が目立つ。深さ10～12cmのピットが3基検出されている。覆土はロームブロックと黒褐色土上の粘土で、縄文土器片6点が出土した。形状などから竈穴住居跡の掘り方である可能性が考えられる。

ピットは3号土坑の南西側にまとまって12基検出した(第5図、第3表)。覆土の類似から同時期のピット群と考えられ、As-B降下以前のものである。

番号	形状	表層/底層(深)	覆土・出土遺物等
SP01	円形	65/15	黒褐色粘質土(10YR5/1)。
SP02	四角形	32/27/21	黒褐色粘質土(10YR3/1)。
SP03	四角形	24/20/15	黒褐色土(10YR3/1)。
SP04	円形	19/17/12	黒褐色土(10YR3/1)。
SP05	四角形	37/20/8	黒褐色土(10YR3/1)。
SP06	不整形円形	26/24/13	黒褐色土(10YR3/1)。
SP07	円形	32/31/21	黒褐色土(10YR3/1)。
SP08	円形	31/28/12	黒褐色土(10YR3/1)。
SP09	四角形	43/28/16	黒褐色粘質土(10YR3/1)、土師器破片1点。
SP10	円形	28/28/10	黒褐色土(10YR3/1)。
SP11	円形	24/22/14	黒褐色土(10YR3/1)。
SP12	円形	25/24/22	黒褐色土(10YR3/1)。

第3表 ピット一覧表



第10図 土坑平面図・断面図及び出土遺物

番号	器種	法量(cm)	①構成 ②色調(内/外) ③土質 ④残存	成・整形技法の特徴	出土位置等
SK01 1	縄文土器 深鉢	口徑 底徑 器高	①良好 ②橙/に濃い黄 ③石英、長石、黒色鉱物、礫 ④断面破片	外面：手摺りし縄文を施文→丸棒状工具による器底文。 内面：ナデ。	覆土上層 加曽利B層式
SK01 2	縄文土器 深鉢	口徑 底徑 器高	①良好 ②橙/に濃い黄 ③石英、長石、礫 ④断面破片	外面：手摺り付。 内面：紐状ナデ。	覆土上層 加曽利B層式
SK03 1	縄文土器 深鉢	口徑 底徑 器高	①良好 ②橙/に濃い黄 ③石英、長石、黒色鉱物、礫 ④断面破片	外面：手摺りし縄文を施文→丸棒状工具による器底文。 内面：ナデ。	覆土中 加曽利B層式
SK03 2	縄文土器 深鉢	口徑 底徑 器高	①良好 ②淡黄砂/に濃い黄 ③石英、長石、礫 ④断面破片	外面：紐状工具による紐状の器底を施文。 内面：ナデ。	底層特設覆土中 加曽利B層式

第4表 土坑出土遺物観察表

第6章 自然科学分析

早田 勉 (株式会社火山灰考古学研究所)

1. はじめに

関東地方北西部に位置する高崎市域とその周辺には、権名や浅間など関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く降灰している。とくに後期更新世以降以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログなどに収録されており(町田・新井, 1992, 2003, 2011)、考古遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには考古学的に遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な方形周溝墓が検出された中居町一丁目遺跡においても、地質調査を実施して、土層の層序や遺構の層位を確認するとともに、高純度で分析用試料を採取して、実験室内でテフラ分析(テフラ検出分析)を実施して、すでに年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を行うことになった。調査分析の対象は、SZ01 南西部、SZ01 北東部、調査区南壁・方台部の3地点である。

2. 調査地点の上層層序

(1) SZ01 南西部

SZ01 南西部では、下位より泥流堆積物(層厚50cm以上)の上位に、周溝が認められた。周溝の基盤の泥流堆積物は、下部30cm以上が黄白色で、上部20cmが黄色を呈する。上部には、重円礫(最大径73mm)が多く含まれている(第11図)。この泥流堆積物は、本遺跡の位置や層相などから、更新世末期におもに烏川沿いを流下したと考えられる高崎泥流堆積物(新井ほか, 1993, 中村, 2003)相当と思われる*1。

一方、周溝の覆土は、下位より黄色泥流堆積物ブロック混じり黒灰色泥層(層厚8cm)、黒灰色泥層(層厚6cm)、かすかに成層した暗灰色泥質土(層厚20cm)、暗灰褐色泥層(層厚2cm)、黄灰色泥層(層厚2cm)、色調がとくに暗い暗灰色泥層(層厚21cm)、黒灰色泥層(層厚12cm)、成層したテフラ層(層厚9.2cm)、桃色細粒火山灰ブロック混じり暗灰褐色砂質土(層厚9cm)、重円礫混じり暗灰褐色土(層厚12cm、礫の最大径47mm)、重円礫や砂を含む灰色土(層厚12cm、礫の最大径31mm)、わずかに灰色がかかった白色軽石や砂を含む灰色土(層厚14cm)、盛土(層厚5cm以上)からなる。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より青灰色砂質細粒火山灰層(層厚0.2cm)、基底に褐色軽石が認められる褐灰色粗粒火山灰層(層厚3cm、軽石の最大径18mm)、橙褐色粗粒火山灰層(層厚2cm)、黄色がかかった灰色粗粒火山灰層(層厚4cm)からなる。このテフラ層は、層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B、荒牧, 1968, 新井, 1979, 町田・新井, 1992など)に同定される。

また、その上位の盛土直下の灰色土に含まれるわずかに灰色がかかった白色軽石は、層位や岩相から1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A、荒牧, 1968, 新井, 1979, 町田・新井, 1992など)に由来すると考えられる。

(2) SZ01 北東部

SZ01 北東部における周溝の覆土は、下位より黄白色泥流堆積物ブロック混じり暗灰色泥層(層厚7cm)、暗灰色泥層(層厚7cm)、黄白色凝灰質砂層(層厚2cm)、黒灰褐色泥層(層厚9cm)、やや褐色をおびた暗灰色泥層(層厚13cm)、暗灰色泥層(層厚13cm)、成層したテフラ層(層厚6cm)、桃色細粒火山灰ブロック混じりでやや明るい黒灰褐色砂質土(層厚8cm)、灰色土(層厚8cm)、わずかに灰色をおびた白色軽石を多く含む砂混じり灰色土

(層厚12cm、軽石の最大径4mm)、盛土(層厚10cm以上)からなる(第11図)。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より基底に褐色軽石が認められる灰褐色粗粒火山灰層(層厚2cm、軽石の最大径8mm)、橙褐色粗粒火山灰層(層厚2cm)、黄色がかった灰色粗粒火山灰層(層厚2cm)からなる。このテフラ層は、層相からAs-Bに同定される。また、その上位の盛土直下の灰色土に含まれるわずかに灰色がかった白色軽石は、層位や岩相からAs-Aに由来すると考えられる。

(3) 調査区南壁・方台部

調査区南壁・方台部では、下位より暗灰褐色土(層厚11cm以上)、黒灰褐色土(層厚7cm)、灰白色軽石混じり黒色土(層厚11cm、軽石の最大径4mm)、黄色泥流堆積物ブロック混じり暗褐色土(層厚5cm)、わずかに灰色がかった白色軽石や砂を含む灰色土(層厚8cm、軽石の最大径4mm)が認められた(第11図)。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

3地点において、テフラ層ごと、また層位にかからないように基本的に5cmおきに設定採取された試料のうち、11試料を対象として、含まれるテフラ粒子の量や特徴を定性的に明らかにするテフラ検出分析を行って、指標テフラの検出同定を実施した。分析方法は次のとおりである。

- 1) 分析対象の試料について、8gずつを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析で検出されたテフラ粒子の多く(第5表)は、次の5種類である。

タイプ1: 無色透明や灰色の分厚い中間型ガラス。この火山ガラスは多くの試料に含まれており、とくにその濃集層率は認められない。

タイプ2: スポンジ状に良く発泡した灰白色の軽石(最大径2.2mm)や、その細粒物であるスポンジ状軽石型ガラス。珩晶には、強磁性鉱物以外の重鉱物として、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

タイプ3: さほど発泡の良くない白色のスポンジ状軽石型ガラス。珩晶には、強磁性鉱物以外の重鉱物として、斜方輝石や角閃石が認められる。

タイプ4: 比較的良く発泡した、淡灰色、淡褐色、褐色の比較的細粒の軽石(最大径2.1mm)や、その細粒物であるスポンジ状軽石型ガラス。珩晶には、強磁性鉱物以外の重鉱物として、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

タイプ5: 比較的良く発泡した、わずかに灰色がかった軽石やスポンジ状軽石型ガラスである。珩晶には、強磁

地点	試料	軽石・スコリア		火山ガラス		重鉱物 (不透明鉱物以外)	
		量	色調	最大径	量		色調
S201南西部	14	*		*	pm(sp), md	灰白、白、無色透明	opx, cpx, am
	16	*		*	md, pm(sp)	無色透明、白	opx, am, cpx
	18	*		*	md	無色透明	opx, cpx, am
	24	*	灰白	22	pm(sp)	灰白	opx, cpx, am
	26	*		**	md, pm(sp)	灰、無色透明、灰白	opx, cpx, am
S201北東部	8	*		(*)	md	灰、無色透明	opx, cpx
	9	*		*	md	灰、無色透明	opx, cpx, am
	10	*		*	md	灰、無色透明	opx, cpx, am
調査区南壁・方台部	0	**	(灰)白、淡灰	3.1, 2.1	pm(sp)	(灰)白、淡灰、淡褐、褐	opx, cpx
	1	*		*	md, pm(sp)	灰、無色透明、灰白	opx, cpx, am
	2	*	灰白	2.1	pm(sp), md	灰白、無色透明	opx, cpx

***: とくに多い, **: 多い, *: 中程度, *: 少ない, (*): 非常に少ない

be: ヲブラス質, md: 中間型, pm: 軽石, sp: スポンジ状, bc: 珩晶, cpx: 斜方輝石, opx: 単斜輝石, am: 角閃石。重鉱物の()は、非常に量が少ないことを示す。

第5表 中居町一丁目遺跡におけるテフラ検出分析結果

性鉱物以外の重鉱物として、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

SZ01 南西部では、周溝覆土基底部の試料 26 や試料 24 に、タイプ 2 のテフラ粒子が比較的多く含まれている。試料 18 や試料 16 には、タイプ 3 の火山ガラスや、火山ガラスが付着した角閃石がわずかに含まれている。SZ01 北東部では、いずれの試料からも、タイプ 1 の火山ガラスが少量ずつ検出された。

一方、調査区南壁・方台部の試料 3 には、タイプ 2 のテフラ粒子が比較的多く含まれている。試料 1 には、タイプ 1 やタイプ 2 のほかに、タイプ 3 の火山ガラスや角閃石もわずかに認められる。試料 0 には、タイプ 4 やタイプ 5 のテフラ粒子が含まれている。とくに、後者のテフラ粒子が多い傾向にある。

4. 考察

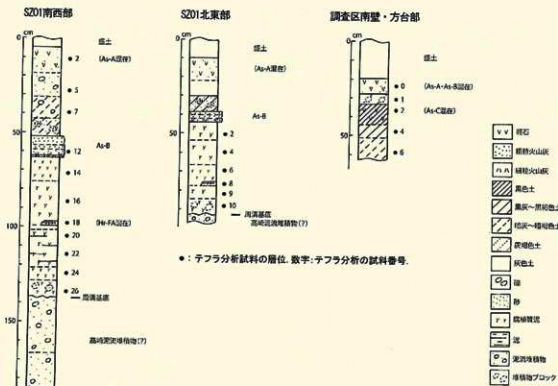
(1) 指標テフラとの同定

テフラ検出分析により検出されたテフラ粒子のうち、タイプ 1 は、その岩相から、多くは更新世末期の浅間火山軽石流期のテフラに由来する可能性が高い。高峰泥流堆積物にはこの種のテフラ粒子を多く含むと思われることから、このタイプの火山ガラスは基盤の泥流堆積物に由来する可能性が高い。

タイプ 2 のテフラ粒子は、岩相から、3 世紀後半に浅間火山から噴出した浅間 C 軽石 (As-C、荒牧、1968、新井、1979、町田・新井、1992、坂口、2010) と考えられる。

タイプ 3 のテフラ粒子に関しては、岩相から、6 世紀初頭に榛名火山から噴出したと推定されている榛名洗川テフラ (Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992 など)、または、6 世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名ニッ岳伊香保テフラ (Hr-FP、新井、1962、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992 など) に由来すると考えられる。本造跡の位置から考えると、前者の可能性がより高いように思われる。

タイプ 4 のテフラ粒子は、岩相から、As-B に由来すると考えられる。また、タイプ 5 のテフラ粒子は、岩相から、As-A に由来すると考えられる。



第 11 図 土層柱状図

(2) 遺構と指標テフラとの関係について

周溝覆土(とくにSZ01南西部)と調査区南壁・方台部の盛土の可能性がある土層の直下のテフラ粒子の特徴をみると、発掘調査で検出された周溝墓の層位は、少なくともタイプ2とタイプ3で特徴づけられるテフラの間、つまりAs-CとHr-FAの間にある可能性を指摘できる。

ただし、より慎重に考えれば、周溝覆土内でのタイプ3の濃集の程度がさほど高くなく、また、調査区南壁・方台部で検出された方台部盛土の可能性がある土層にわずかに含まれるタイプ3のテフラ粒子が方台部積築前に降灰したテフラ粒子とすれば、Hr-FA降灰後の可能性も完全に否定できない。もっとも、方台部盛土の可能性がある土層自体、検出された状況はさほど良くないことから、後世に何らかの作用に伴う攪乱により雑名系テフラが混入した可能性も残される。

いずれにしても、今回検出された古墳時代のテフラ、とくに雑名系テフラに関しては、一次堆積層ではなく、いわゆる(肉眼で確認できない)クリップ・テフラで、濃集の程度もさほど良くないことから、土層の状況や考古遺物の検討などを合わせて、発掘調査で検出された周溝墓の層位の総合的な検討が行われると良い。

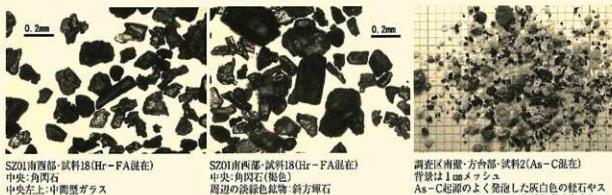
5. まとめ

中居町一丁目遺跡において地質調査を実施するとともに、テフラ分析(テフラ検出分析)を実施した。その結果、浅間Bテフラ(As-B)の一次堆積層のほか、浅間C軽石(As-C)、雑名ニツ岳浅川テフラ(Hr-FA)あるいは雑名ニツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)、浅間A軽石(As-A)などの指標テフラを認めることができた。発掘調査で検出された周溝墓に関しては、As-CとHr-FAの間に層位がある可能性が指摘される。

*1 鳥川浩一には、更新世末期から安新世初頭にかけて複数の泥炭堆積物が認められており(早田2011)、それらと高崎泥炭堆積物など高崎台地とその周辺で認められる泥炭堆積物との関係については不明な点が多い。

文献

- 新井房夫(1982)関東東北南西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学版, 10, p.1-79.
 新井房夫(1979)関東地方北南西部の縄文時代以降の示形テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
 新井棟之・矢口裕之・早川由紀夫・中村正芳(1993)およそ1万年前に発生した高崎泥流の分布と起源。日本地質学会第100年学術大会講演要旨, 危牧重雄(1998)浅間火山の地質。地質調査所報, no.14, p.1-45.
 町田 洋・新井房夫(1992)「火山灰アトラス」。東京大学出版会, 276p.
 町田 洋・新井房夫(2003)「新編火山灰アトラス」。東京大学出版会, 336p.
 町田 洋・新井房夫(2011)「新編火山灰アトラス(第2期)」。東京大学出版会, 336p.
 中村正芳(2003)高崎台地を覆う高崎泥流。高崎市史編さん委員会編「新編高崎市史通史編1」, p.84-86.
 坂口 一(1986)雑名ニツ岳志部FA・FP層下の土層層と墳墓跡。群馬県教育委員会編「歴史と自然誌・今井神社古墳群・寛政青柳遺跡」, p.103-119.
 坂口 一(2010)高崎市・中居町一丁目遺跡周遊集落の動向-中居町一丁目遺跡H22の水田耕作地と周遊集落との関係-。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「中居町一丁目遺跡3」, p.17-22.
 早田 勉(1989)6世紀における雑名火山の2種の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.207-212.
 早田 勉(2011)雑名町城の自然環境とその歴史。雑名町誌編さん委員会編「雑名町誌通史編。上巻。原始・古代・中世」, p.7-36.



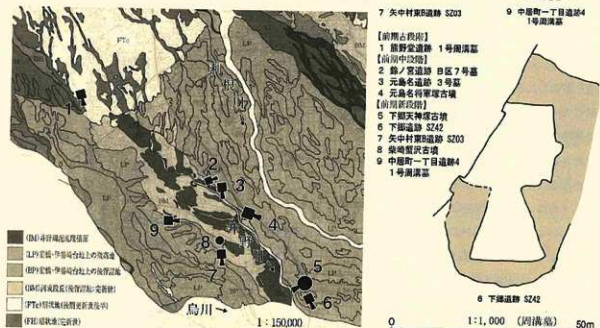
第12図 中居町一丁目遺跡テフラ分析写真

第7章 調査成果

本調査では中居町一丁目遺跡において2基目となる周溝墓を検出した。1号周溝墓は、大型の方形周溝墓との認識で調査を進めたが、工事立会の際に前方部と思しきプランを検出したことから、前方後方形周溝墓であるとの判断に至った。全容の解明は今後の調査に委ねられるが、現状を整理して調査成果としたい。なお1号周溝墓は、第13図に示すように井野川低地帯の両岸に立地する墳墓の一つに位置付けられることを確認しておきたい。

1号周溝墓の復元とその評価

井野川低地帯周辺の前方後方形周溝墓については、現時点で確実なもの6遺跡6基を数える(第13図1~3, 6, 7, 9)。上流域に位置する熊野堂遺跡1号周溝墓は、周溝内にAs-Cの一次堆積があり、県内最古の前方後方形墳墓である(古墳時代前期古段階)。前期中段階には左岸の元鳥名符塚古墳のやや上流に鈴ノ宮遺跡B区7号墓・元鳥名遺跡3号墓が築造され、前期新段階には下流域の下郷遺跡SZ42、さらに右岸にも矢中村東B遺跡SZ03が築造される。本遺跡1号周溝墓は、井野川低地帯右岸に位置する前期新段階の前方後方形周溝墓と位置付けられる。1号周溝墓の規模については、古段階から新段階への移行で指摘される前方部の伸長化(深澤2016ほか)を念頭に第13図9のように推定し、新段階の前方部長比率値(前方部長÷墳丘長)×100は、下郷遺跡SZ42の46.2、矢中村東B遺跡SZ03の41.7を参考に、中間値の43.8とした。前方部の長さには不確実性が残るが、墳丘長285m(前方部長125m、後方部長160m)、前方部幅9.5m、後方部幅16.5mとなり、墳丘長42mの下郷遺跡SZ42の約2/3、同24mの矢中村東B遺跡SZ03を若干上回る規模である。周溝の最大幅7.0mは矢中村東B遺跡SZ03の7.2mと遜色なく、周溝幅を考慮すると、これより小さい墳丘長は想定しにくい。

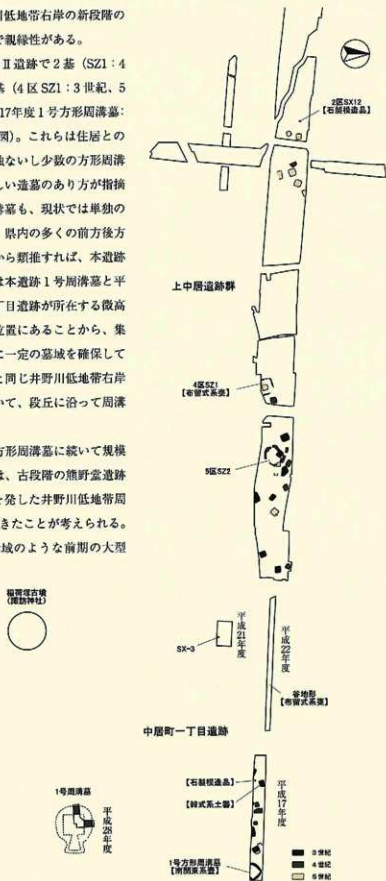


第13図 井野川低地帯周辺の前方後方形周溝墓と前期古墳

矢中村東B遺跡SZ03は本遺跡と同じく井野川低地帯右岸の新段階の前方後方形周溝墓であり、軸線が直交する点で親縁性がある。

中居町周辺では、これまでに上中居辻薬師Ⅱ遺跡で2基（SZ1：4世紀、SZ2：4世紀初頭）、上中居遺跡群で2基（4区SZ1：3世紀、5区SZ2：4世紀）、中居町一丁目遺跡で1基（平成17年度1号方形周溝墓：3世紀）の方形周溝墓が検出されている（第14図）。これらは住居との切り合いもあることから、小規模な集落に単独ないし少数の方形周溝墓が集落域と未分離に配置され、継続性に乏しい造墓のあり方が指摘されていた（高崎市教委2009）。本遺跡1号周溝墓も、現状では単独の前方後方形周溝墓として捉えざるを得ないが、県内の多くの前方後方形周溝墓が周溝墓群のなかの1基になることから類推すれば、本遺跡周辺に周溝墓群が広がる可能性がある。それは本遺跡1号周溝墓と平成17年度1号方形周溝墓がともに、中居町一丁目遺跡が所在する微高地東端において、東方に広がる低湿地を隔む位置にあることから、集落域に近接しながらも、微高地東端の低地境に一定の墓域を確保していた可能性が考えられるからである。本遺跡と同じ井野川低地帯右岸にある上大類北宅地遺跡や矢中村東遺跡において、段丘に沿って周溝墓群が形成されていることが参考になろう。

中居町周辺において、前代までの小規模な方形周溝墓に続いて規模の大きい前方後方形周溝墓が出現した背景には、古段階の熊野堂遺跡1号周溝墓の立地に象徴される、上流域に端を発した井野川低地帯周辺の開発が、新段階にかけて下流域へ進展してきたことが考えられる。井野川低地帯右岸域は、同左岸域や烏川左岸域のような前期の大型墳がないことから、前期には両地域による一体的な開発が行われたと想定されている（若狭2007）。しかし中段階に元高名将軍塚古墳を築造した左岸には運れるもの、新段階になって矢中村東B遺跡と中居町一丁目遺跡で前方後方形周溝墓が相次いで築造されることは、井野川低地帯下流域右岸のなかに小地域が顕在化してきたことを示している。中居町周辺はもともと、古段階において東海西部系を主体とする土器群のなかに南関東系の土器を含むほか（平成17年度1号方形周溝墓）、県内で数少ない布留式系土器を出土する地域である。上中居遺跡群4区SZ1と平成22年度中居町一丁目遺跡の低地から、布留式系の壺が出



第14図 1号周溝墓と関連遺構

土している。小地域としての成長を遂げる過程には、これらの土器に象徴される外来的要素が介在したことは十分に想定される。布留式土器は県内では高崎、太田両域の限定された地域でのみ出土し、一部には布留式土器の拡散を初期ヤマト政権の勢力拡大との関係で捉える見解がある(寺沢1987, 群理文2010)。下郷天神塚古墳での植輪の採用や、柴崎蟹沢古墳での三角縁神獣鏡2面と内行花文鏡2面の副葬が、新段階における井野川低地帯下流域とヤマト政権との関係性を反映しているとすれば、古段階において布留式系土器を出土する当地もそのような関係性の一画を占めていた可能性も考えられる。

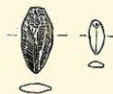
古段階に築造された平成17年度1号方形周溝墓が集落の有力者層の墓であるならば、新段階まで約100年の長期にわたって葬送祭祀が行われたことは、1人の被葬者ではなく、特定の一族を葬送する場であった可能性が指摘されている(群理文2007)。本調査の1号周溝墓は、それと入れ替わるように出現しており、古墳時代前期の中居町一丁目遺跡及び上中居遺跡群の一つの到達点を示すものといえよう。今後、前方部や埋葬施設の調査、築造時の葬送に伴う遺物の発見が待たれるところである。

なお中居町一丁目遺跡及び上中居遺跡群の集落は3世紀後半から5世紀後半まで継続するが、井野川低地帯下流域右岸の開発が顕著に進むのは5世紀になってからである。5世紀中頃から岩鼻二子山古墳や不動山古墳などの大型前方後円墳(岩鼻古墳群)が成立し、近隣の集落遺跡からは渡来人の存在を示す韓式系土器が出土している。中居町一丁目遺跡では平成17年度調査で韓半島系の叩き整形鉢が出土しており、地域開発への渡来人の関与が窺われるのは岩鼻古墳群の影響であろうか。前方後方形周溝墓の築造は、その前後に姿を見せる布留式系土器や韓式系土器とともに、中居町一丁目遺跡と上中居遺跡群が一定の小地域を形成したことを雄弁に物語っている。

1号周溝墓出土遺物

調査区北東部の周溝(後方部北辺中央)の遺物については、ある程度の埋没が進み空地化した周溝の外側から遺棄されたもので、周溝墓築造時の葬送に用いられたであろう底部穿孔土器などは伴っていない。遺物の組成が4世紀後半では壺・埴・小型器台・S字甕があるが、壺がごく少量であること、5世紀前半では使用痕のない甕や高坏に石製模造品が伴うことから、1号周溝墓造営以降にその周辺で執り行われた祭祀に関わる遺物と判断される。古段階の熊野堂遺跡1号周溝墓では、5世紀後半の多量の土器器高坏とともに剣形の石製模造品と土製勾玉が出土しており、古墳時代前期の前方後方形周溝墓の周辺で中期においても祭祀が行われたことを示す同様の事例である。

中居町一丁目遺跡と上中居遺跡群において住居数が最大となる5世紀には、集落縁辺部や水辺で石製模造品を伴った祭祀行為がみられる。上中居遺跡群に隣接する上中居辻薬師Ⅱ遺跡では5世紀初頭前後の溝から剣形と勾玉が、上中居遺跡群2区SX12の祭祀跡では5世紀後半の壺・埴・高坏とともに剣形6点・有孔円板1点が出土している。上中居辻薬師Ⅱ遺跡の剣形は関の形状を残し両面ないし片面に鑄の表現がある。本遺跡と上中居遺跡群SX12の剣形は関の形状が退化し、断面も長方形になるが、SX12はさらに双孔となって有孔円板と区別しにくいものもある。このような形状の違いは、5世紀代における剣形の変遷過程を示していると考えられる。本遺跡は明らかな未成品を伴っており、近隣に石製模造品の工房跡の存在が想定される。



上中居辻薬師Ⅱ遺跡
(SX12)



中居町一丁目遺跡4
(S201)



上中居遺跡群
(SX12) 図尺1/4

第15図 剣形石製模造品

*古墳時代前期の三期区分(古段階・中段階・新段階)は引用・参考文献の若狭・沼澤2005による。

引用・参考文献

- 柳沢重昭 1994 「毛野・形或期の地域相 - 前方後方墳及び周溝墓の分布を中心に」 『戦国史学』 第91号 戦国史学会
 柳沢重昭 1994 「毛野の周溝墓と前方後方形周溝墓」 『戦国史学』 第92号 戦国史学会
 群馬県教育委員会 1980 「下集」
 (公財)群馬県歴史文化財調査事業団ほか 1990 『岡野古墳跡(2)』
 (公財)群馬県歴史文化財調査事業団ほか 2007 『中居町一丁目遺跡』
 (公財)群馬県歴史文化財調査事業団ほか 2010 『中居町一丁目遺跡3』
 小島敦子 1986 「群馬県の方形周溝墓 - 春在のパターン分類を通して -」 『筑波北原遺跡 今井神社古墳群 筑波古墳遺跡』(公財)群馬県歴史文化財調査事業団ほか
 小島敦子 1990 「葛城からみた集落論研究の発展操作」 『古代』 第90号 早稲田大学考古学会
 龍原祐一 1997 「石製模造品彫削の研究」 『歴史考古学』 創刊号 歴史考古学学会
 高崎市教育委員会 1978 「鈴ノ宮遺跡」
 高崎市教育委員会 1979 「元島名遺跡」
 高崎市教育委員会 1985 「矢中村東B遺跡」
 高崎市教育委員会 1988 「矢中村東C遺跡」
 高崎市教育委員会 1992 「上中込遺跡Ⅱ遺跡」
 高崎市教育委員会 2009 「上中込遺跡Ⅲ」
 高崎市教育委員会 2010 「中居町一丁目遺跡2」
 田口一彦 1984 「古墳時代前期における墳墓出土の土器をめぐって - 上野を中心として -」 『出現期古墳の地域性』 千曲川水系古代文化研究所ほか
 田口一彦 1997 「前方後方墳二題」 『群馬考古学』 7 群馬土器研究会
 田口一彦 2000 「北関東圏における5字(に)終末の波及と定着」 『5字壳を考ふる』 東海考古学フォーラム
 寺沢謙 1987 「布留0式土器製造論」 『同志社大学考古学シリーズ』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
 利根川幸彦 1997 「前方後方形墓・方形周溝墓の形成 - いわゆる「形或」しない埋葬者群」の行方」 『埼玉早立博物館紀要』 22号
 沼澤政仁 2011 「前期の上毛野 - 外来要素の受容と在地化 -」 『別冊季刊考古学』 17 古墳時代毛野の実像 藤山園
 沼澤政仁 2015 「群馬県地境における前方後方形墳墓についての兼論」 『同志社大学考古学シリーズ』 第15号 第15号 専修大学考古学研究会
 沼澤政仁 2016 「方形周溝墓と前方後方形周溝墓との相関性について - 群馬県の発掘事例に基づく検討 -」 『専修考古学』 第15号 専修大学考古学研究会
 若狭徹 2007 「古墳時代の水利社会研究」 学生社
 若狭徹 2013 「群馬県の大室内墳の傾向と古津八幡山古墳」 『シンポジウム 藤原平野の王墓 古津八幡山古墳を考ふる』 新潟市文化財センター
 若狭徹・沼澤政仁 2005 「北関東圏における古墳出現期の社会」 『新群馬における高地性集落の解体と古墳の出現』 群馬県考古学会

抄 録

フリガナ	ナカイマチイッチョウメイセキヨシ							
書名	中居町一丁目遺跡4							
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第380集							
編著者名	矢島浩 常深尚							
編集機関	有限会社毛野考古学研究所							
編集機関所在地	〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1							
発行機関	有限会社毛野考古学研究所							
発行年月日	西暦2017年1月31日							
ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
群馬県高崎市 中居町一丁目遺跡	群馬県高崎市 中居町	102020	684	36° 19' 12"	139° 2' 12"	20160719 ?	135㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中居町一丁目遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 時期不明	土坑 2基 周溝墓 1基 ビット 12基 倒木版 1基	縄文土器(深鉢) 土師器(壺・甕・高坏・器台) 石製模造品(銅形、有孔円板)		SZ01は幅6.2~7.0mの周溝を有する古墳時代前期の周溝域であり、前方後方形になる可能性がある。周溝内からは、古墳時代前期から中期にかけての土師器や石製模造品が出土した。		

写真図版



1号周溝墓出土遺物 (古墳時代中期)

